

中の一つ、杵島岳から、外輪山をうち眺めてみると、格好な岩が一つ見える。ミコトは杵島岳の上にもう跨がって、得意の弓を引き絞って、この岩に向って一矢を放たれる。眼下に見える岩をねらったのだが、阿蘇谷を距けて射るのだから、なかなか届かぬ。二本、三本、四本と続けざまに射た矢が、うなりながら阿蘇谷の上空をとんで、途中の田圃の中におちて、一つ宛の瀬を作り、やとと百本目が目ざす大岩を貫いた。この時に出来た九十九本の矢のあとが九十九瀬であり、最後に射貫いた石には、今も矢の跡が残っていて、村人はこの石を「的石」と呼びシメ縄を張りめぐらし、今も毎年大明神様のお祭を欠がさない。

とここで——大明神様のお伴で毎日あちこちと引きまわされていた鬼八法師については、また別の物語がある。山の上からあちこちと矢を放っては、それを拾って来いと命ぜられる、はじめのうちは鬼八も宙をとんで、いちいち矢を拾いに行ったが、あとではもうたまらなくなってきた。とうとう、ある日、鬼八はめんどくさがって、足で矢を拾って、ヒョイと大明神様に投げかえしたものである。お気に入り入りの鬼八のことではあるが、大明神様これにはさすがに腹を立てて、

「この無礼ものが！」
と鬼八を追っかけられる。鬼八は谷うちを方々逃げまわっていたが、とうとう外輪山をこえて、矢部までのがれたとこ

ろを、取りおさえられてしまう。鬼八はそこで首をはねられるのだが、その時、八度大きな尻を放ったから、この土地をヤベと云うのだと云う、まことにユーモラスな説話が語られている。首をはねられると云うせば詰った場でも、尻の話が出るほど、阿蘇の人々はいつも素朴な人情を忘れない。

□人間と神様が今も和やかにまじりあって……

さて、その鬼八法師の首を埋めたところが実はこの文章の冒頭に書いた霜宮神社と云うことになっているのだから、愉快である。鬼八は首をはねられたのをう



おんだ祭りの行列……

らんで、毎年阿蘇地方にひどい霜を降らせ、作物を枯らしてしまふ。そこで土地の百姓たちが、鬼八法師の霊をなぐさめるために祠を建てて祭ることになったのが、この霜宮神社だと云う次第である。

行ってみると、阿蘇神社から二キロほど離れた阿蘇盆地のまん中の淋しい村はずれにひそやかに営まれたお社である。この社から少しはなれた村落の中に「火たき殿」があって、八月の末からここに神様をお移し申して、十日の間、火を焚いて神様をおぬくめ申し上げるのである。おどろくべきことは、この永い間、昼夜の別なく続けねばならぬ大変な神事に奉仕しようとして申し出る娘さんが、いまもあとを絶たぬと云うことである。もちろん何の報酬がある訳でもなく、ただこの「火焚き乙女」にえらばれることの光栄があるだけである。

つい数年前まではこの役にえらばれた娘さんは期間中は学校も休んで奉仕したのだが、この点は近頃あらためられて、学校の授業だけは受けることになり、その間母親が代って火を焚くことになったが、それにしても容易ならぬ仕事であることには、ちがいはない。娘さんとその母親にとつての大きな負担である上に、村人にとつても、毎年この期間に焚くだけの燃料を供出しなければならぬ上に、「乙女上げ」と呼ばれる最終日には、神社の前で大きな聖火をつくり、火渡りの神事がおこなわれること、前に述べた通

□火の山のエネルギーと、雄渾な風光と

阿蘇の教あるお宮のうちの総本山とも云うべきものはいま一の宮町に本社がある阿蘇神社である。これは所謂、宮柱太知りまして、荘厳なお社となっているが、もともとの阿蘇の本社は火を噴く山の頂にあつた、今日の山上神社がそれである。この山上のお社には神殿がない、いや、もっと正確に云えば、噴火口そのものが神殿なのである。御神体は火を噴くお山であつて、その他の何ものでもない、

阿蘇神社の神主さんに向つて、御祭神はと問うならば、かれ、威儀を正して答えるであろうように、それはタケイワタツノミコトである。そしてこのミコトの御素性も、神武天皇の御血筋をつたえたことになっているのだが、そうした因縁付けは、阿蘇神社が国の庇護を受けるようになってから、さかしき何代目かの神主さんが言い出した説明であつて、われわれは正直にこの神様のお名前そのものにこもる意味を理解したい。タケイワタツ——空高く聳え立った巨岩、そしてその下から永遠の精気をもつて噴出する神泉、これが阿蘇の神様であつた。人々は山上のこの大いなる磐石を仰ぎ、そのも

とにふつとたぎる霊泉を伏しおがんだ。ただ、それだけで人々の信仰をかき立てるに充分であつた。

阿蘇のめずらしさは、ここぞ尽きる。このめずらしさがもたつて、絶妙で簡潔な阿蘇神話も生まれたのである。しかもそれが昭和の今日もこの谷間に生きる人々の心を養い育てているのである。

阿蘇の噴煙を仰ぐことができる限りの村々に阿蘇講が編成されていた。そして毎月の講会で積み立てられた資金で、村々から一組宛の行者が、春秋の彼岸の日を期して、一斉に阿蘇のお山への行進をおこした。ワラジ、脚絆に白木綿の巡礼姿で、行列はお山の東西南北から、野こ

え山こえて山上まで続いたのである。日夜遠くから拜んでいる噴煙のものと山霊に、一生一度は、往つて拜むことが、講中の誰もが抱く夢であつた。そして代参が済むと、山麓の温泉宿で疲れを慰やして、定めの日、村にかえつて行つた。村では、サカムカエと云つて、村境まで出迎え、門先にネコブクを敷き、サカナゴシラエをして、代参者のかえりを待ち受けていたのである。

思えば、わが阿蘇のお山こそは、山麓の農民たちだけでなく、噴煙を仰ぐ限りの村々にとつて、営農のたよりであり、息災のよすがであつた。

瀬戸内海から有明海にぬけた阿蘇水道

★観光 これからの阿蘇観光

— 一周遊化、広域化をどう進めるか —

阿蘇観光のあゆみ

阿蘇の観光は、わが国の国立公園制度の歴史につながるといえる。昭和六年わが国のすぐれた自然の風景地を保護利用し、ひろく国民の保健休養に資することを目的として国立公園法が制定され、同九年雲仙とともに国立公園に指定された。当時すでに阿蘇は、その世界的な複式活火山と大草原美でひろく内外観光客に親まれ、戦前における観光の最盛期ともいえる昭和十年には年間三三万人の観

光客を迎えていたのである。そして戦後観光の時代への開幕ともいえる昭和三十年には年間約一二三万人に達し、本県観光の転機といえる九州横断道路の開通した翌年の昭和四十年には年約三六八万人と、この十年間に観光客数において三倍の飛躍的增加を示している。また県外客の阿蘇を中心とした誘致圏については、近畿三六・五%、関東一八・七%、北九州一四%、中部七・八%と殆んどが関東、関西を中心とする観光人口の多い広域誘致圏からの観光客となつている。

阿蘇観光客の推移

年次	観光客数	県内客	県外客
昭和10年	330,000人	210,600人	120,000人
昭和30年	1,227,629	534,041	693,638
昭和40年	3,682,299	1,399,273	2,283,026

(注) 昭和10年については、当時の阿蘇国立公園事務所資料推計による。昭和30年および昭和40年については、本県観光客利用状況調査(県観光課)

阿蘇観光の位置づけ

九州8字型周遊観光ルート

九州横断道路が九州観光の焦点として、全国に大きくクローズアップされた昨年、政府においては「国際観光地および国際観光ルートの整備方針」によつて、わが国の縦貫ルートとして東京—京都—大阪—福岡の東京九州ルート、そして周遊ルートとして九州における国立、国定公園と主要都市を結んだ北九州—福岡—唐津—長崎(雲仙・天草)—熊本—